平和の代償

多摩区支部　久保田　昌司（子）
戦没者　久保田　福梅
戦没地　中国・広東省

父が戦死してから六十五年がたった。終戦一ヶ月前の七月九日中国広東省に於いて戦傷死、三十三歳でした。

私は満五歳で戦争の本当の怖さや悲惨さがよく理解できない歳でした。昭和十九年三月、小雪がちらつく寒い朝、親戚や近所の人たちに日の丸の小旗と歓呼の声で送られ「元気で行ってまいります」と言って、国鉄南武線久地駅から出征していったのをかすかに憶えている。残された家族は母、幼い弟と妹、それと七十歳を少し越えた祖父の五人でした。

家は川崎の北部、当時は農村で米と麦、多摩川名産の桃、梨などを作る小規模な農家でした。それまで父は祖父と一緒に家族のため農作業に励み平穏な生活を送っていた。祖父は息子が戦争に取られたということで顔にこそ出さなかったが張り合いをなくし、働く意欲を失くしたようだったと母が言っていた。

農家の生まれでなかった母は幼子三人を抱え、畑仕事をやってゆくのはきつく大変だった。親

©2011_財団法人神奈川県遺族会

戚の人達などの助けを借りて父が帰ってくるまではと必死になって働き頑張った。

しかし、二十年になるとB29による空襲がたびたびあり、焼夷弾や爆弾が近くに落ちはじめるようになった。ラジオから「ブーブーブー」と鳴り空襲警報が発令されると防空壕に逃げ込んだ。三月十日の夜は東京方面の空が、空襲による火災で真っ赤に染まっていたのを今でもはっきりと憶えている。空襲が身近になりその怖さも増した。一方で母は年老いた祖父とで畑仕事をやってゆくのは大変で土地の一部を他人に貸したりした。生産した物のほとんどは供出し、家に残るものはわずかだった。食糧不足で夜など空腹で眠れないときがあった。四月になり祖父は父の身を案じながら老衰で亡くなった。物も食糧も十分でないなか空襲を避け、形だけの葬式が行われた。

終戦近くなると食糧難はますますひどくなり、豆の多く混ざった麦ご飯、代用食にイモ類やカボチャなどもよく食べた。そして八月十五日、暑いお盆で親戚の人たちが家に来ていた。正午に玉音放送があるということで皆ラジオの前に集まりそれを聴いた。そして無条件降伏（敗戦）を知った。大人たちは気が抜け落胆した。反面、戦争が終って、もう空襲で防空壕に逃げこむ必要もなく、夜も敵機を気にすることなく灯りをつけ、安心して眠れるようになったと安堵した。他方で、日本が先行きどうなって行くのか誰もまったく分からず不安だった。

私も子供ながら戦争に負けたということは分かっても、これから日本はどうなってゆくのかなど知るよしも無かった。母は戦争が終ったので父は必ず帰ってくるものと信じ、それからは毎日その帰りを待ち詫びていた。神頼みで遠方の社寺へお参りに行ったりもした。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

近所で出征した人が帰ってきたり、遠くの知り合いの人が帰ってきたという話を聞いては母は羨ましがった。なぜ家だけは・・・と思ったと言っていた。

その年の十二月の初め、日本へ無事帰ったときは互いに連絡をとり合おうという約束で父の戦友が家に訪ねてきてくれた。そしてその人は「父が乗っていた馬が地雷に触れ、額に傷を負い担架で病院へ運ばれるのを見届け別れた」とそして「今、帰ってきていないなら病院へ運ばれる途中、暑さと傷の程度から考え恐らく亡くなったのではないか」と母に話してくれたそうです。父の帰ってくるのを信じていた母は落胆して深く悲しんだ。

何日も人目のつかないところで泣いていたのを記憶している。母は「カミやホトケも信じられない」と言って嘆いていた。

翌年の二十一年三月になって戦死の公報が届いた。私が小学校に入学して間もない四月地元の青年団の方と親戚の人、何人かと一緒に横浜のお寺へ遺骨を受け取りに行った。

箱の中の遺骨は石ころみたいにコロコロと音がして父のモノだとは思えなかった。

母の悲しみは増したが三人の子供を養育するため気持ちを切り替えなければならなかった。生活していくには残された田や畑を耕し管理していく必要があった。女手一つではどうにもならず、一年たった頃親戚の人のお世話でやむなく再婚した。義父となった人は戦争から帰った人でした。初め私達子供は実の父のように思い嬉しかった。しかし年月が経つにつれ世間から父が馬鹿にされたり、私達は差別されたりして辛く淋しい思いをした。また母は義父と子供達の間に立ち違う面で悩んだり苦労したようだった。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

これも戦争が残したひとつの傷跡だと思えるようになったのはずっとあとの社会人になってからである。

中学生のとき私の将来について、母と話し合った。その結果農業は継がず進学することにした。工業高校へ進み、東京の民間放送局で約三年働き、その後工学系の大学へ進むことができた。卒業時それまでお世話になった多くの恩を若い人達に返したく、神奈川の県立高校の教員になった。その三十三年間は生活してゆく糧の電気技術中心の指導であったが傍ら平和の大切さも伝えたと思っている。

こうしたことができたのも母を支えてくれた義父がいたからこそ経済的に家族がやってこられたのだと思っている。

私たち子供三人もそれぞれ独立し孫を持つ歳となり平穏な生活を送らせていただいている。いずれにしても母親の子供に対する愛情は強く絶対的なものだと身を持って解った。

定年の前後、ＪＩＣＡの海外シニアボランティアとしてケニヤに一年、ネパールに二年間行き、若者たちへ技術指導をした。これらの国には隣国、ソマリアとチベットから多数の難民がいた。これらの人達は家族がバラバラになったり、親、兄弟を失ったりした人たちが多数いた。

平和が本当に大切である事はこれらの現地の状況を直にみて痛切に感じた。

一昨年から、遺族会の仕事を手伝わせていただいている。昨年（二〇〇九年）は九月には日本遺族会主催の戦没者慰霊巡拝の旅に中国広東省方面へ行く機会を与えられた。父が戦死したという広東省・韶関にも行き、父が死亡したという兵站病院を訪ねた。現在は立派な市民病院に変わ

©2011_財団法人神奈川県遺族会

っていて当時を思わせるものは何も残っていなかった。しかし、周囲の山河、そこここを吹き渡る風は六十四年前と変わってはいないと思えた。もし病床で父もこの風景を眺めていたなら、故郷の山河や家族を思い、妻や子供にどんなにか会いたかったかと思うと熱いものが胸にこみ上げてきた。

巡拝一行は九月の暑い陽射しのなか病院近くの川岸の空き地で川面に向かい黙祷をし、父が好きだったタバコと花を供え冥福を祈った。自分が子供に戻って懐かしい父に会えたような気がした。父の死に対し一区切りがついた。思ってもみなかった慰霊巡拝は私にとり大変意義深いものだった。本当に行って良かったと思っている。心残りは母にも来させてやりたかったと思った。その母も十四年前そしてよく働き家計を支えてくれた義父は八年前ともに戦争の大きな犠牲を背負い静かに世を去った。

この六十五年はわたしの人生そのものです。人々が幸せな生活を送るに大切な条件は第一に平和です。しかし、人の心は弱く移ろいやすい。諺にあるように「喉元過ぎれば熱さを忘れる」と争いは互いに得にならないと分かりながら、いつの間にか我が儘や欲望が膨らみ他人を思いやる気持ちが薄れ、妬みや憎しみが生じて争が始まる。これが国どうしになると戦争に発展することがあるのだと思う。

先の大戦で大きな犠牲を払った日本。現在の平和で自由なそして豊かな生活をいつまでも維持できるように折に触れ時代の大きな転換期であった過去を振り返って微力であるが世界の平和に尽くせればと思う。

©2011_財団法人神奈川県遺族会